NEWS きのくに

GREEN COMMUNITY COLLEGE

Vol.16【1】
2012〈秋号〉

きのくに活性化センター
発行責任者／中田肇　発行日／2012年10月1日
〒646-0011 和歌山県田辺市新庄町3353-9
和歌山県立情報交流センター ビッグ・ユー内
TEL&FAX0739-26-9670
http://www.aikis.or.jp/~aoi-kii/

地域再生の場としての廃校舎
―「学校」を基点に地域と人の連携・協働へ―

きのくに活性化センター事務局長
和歌山大学経済学部教授
鈴木裕範

秋津野ガルテン

廃校になった本宮町の三里中学校

「学校がなくなって、村が栄えたためしがない。しかし、こどもたちのことを考えると休校も仕様がない、悲しい田舎です」。100年の校史を刻んだ学校が、その歴史に幕を閉じる日に、村民から聞いた言葉である。1980年代のことだが、その後もこどもが消え、いくつもの学校がなくなった。

和歌山県内では、過疎化と少子高齢化にともなう児童生徒の減少による小中学校の休廃校があとを絶たない。紀南地域ではこの春、那智勝浦町の三川小学校、本宮町の三里中学校が廃校になった。新宮市では、丹鶴、千穂の２小学校が廃校、統合された。1992年度から2011年度までに全県で約120校、紀南地域では約70校が廃校になった。平成の市町村合併も、学校の統廃合を加速させた。

学校はだれのものか―、この問いに対する答は自明である、こどもたちのものである。そして、地域とともにある空間である。学校は地域社会における教育・文化の拠点であり、地域と地域、ひととひとをつなぐ、地域コミュニティを育む場でもあるからである。それだからこそ、学校がなくなることの意味は大きい。

廃校になった小中学校のその後を、きのくに活性化センターは和歌山大学経済学部と２年間にわたって調査をした。田辺市の上秋津小学校は児童数の増加で新校舎が建ち、取り壊される運命の木造校舎が住民の努力でグリーンツーリズム施設「秋津野ガルテン」として残った。古座川町の平井分校の校舎と校庭は、「柚子の里」の女性たちが地域に生きる場所となった。新宮市熊野川町・西敷屋小学校は、「ＮＰＯ共育学舎」による都市と熊野を結ぶ学びの場として、あらたな協働と交流をつくりだしてきた。廃校舎はこのように近年、地域づくりの場所に甦る動きが広がっている。しかしながら、和歌山県の廃校舎で2002年度以降現存する建物のうち、４割近い32校の建物は利用されていない。

廃校舎問題は、今日全国各地に共通する課題である。そして、この問題が深刻なのは、農山漁村だけではなく、都市の中心市街地でもみられることである。今後人口の大幅な減少が見込まれる和歌山県においては、これからも小中学校の統合や廃校は必至である。

地域に即した、多角的な観点から、いま一度「眠る学校」の価値を地域資源として再評価したい。廃校舎から始まる地域づくりが、いま過疎の紀南地域に求められている。学校が失われることは、地域コミュニティの危機である。廃校舎を活かし、コミュニティを再構築する地域づくりがもつ、可能性がある。

CONTENTS

・地域再生の場としての廃校舎　鈴木裕範 …… 1 面
・きのくに活性化センター総会　平成24年度事業決定 …… 2 面
・地域をつくる女性たち①　廣本直子 …… 3 面
・地域をつくる女性たち②　倉岡有美 …… 4 面
・地域をつくる女性たち③　竹田愛子 …… 5 面
・きのくに活性化センター10周年記念式典　新研究員・金 月 …… 6 面

NEWS GREEN COMMUNITY COLLEGE
きのくに
Vol.16【2】
2012〈秋号〉

きのくに活性化センター平成24年度総会開催!!
本年度事業を決定。

きのくに活性化センターは、７月３日に田辺市上秋津にある秋津野ガルテン会議室で、平成24年度総会を開いた。総会には田辺市の福田安雄副市長や古座川町の武田丈夫町長、那智勝浦町寺本眞一町長ほか和歌山県、田辺、新宮両広域市町村担当者、田辺・新宮両商工会議所、紀南農協、和歌山大学などから各委員が出席した。

最初にあいさつに立った中田肇会長は、「センターは設立10周年を迎えた。しかし、紀南地域は依然多くの課題を抱えている、今後も引き続きセンターが存在する意味と役割がある」と強調した。

総会では、平成23年度一般会計、事業会計、事業実績が報告されたあと、平成24年度一般会計ならびに事業会計、事業計画が提案され、全会一致で承認された。

総会終了後、農業法人株式会社秋津野木村則夫代表取締役が講演し、地域住民が主体的に取り組んできた秋津野塾にはじまる上秋津の地域づくりの取り組みを紹介した。

木村則夫代表取締役の講演

きのくに活性化センターの平成24年度事業

（1）「廃校舎の利活用と地域再生」

廃校舎の利活用を地域づくりの視点から研究する。そのために、地域に呼びかけて「廃校舎と地域再生研究会」(仮称)を発足させて勉強会を数回開催、その成果をふまえて「フォーラム」を開催する。

（2）大学と商店街の連携交流による新宮市仲之町商店街活性化モデルの研究

商店街活性化に向けて、さまざまな取り組みを展開している仲之町商店街で、和歌山大学経済学部の学生が、商店主に聞き取り調査を実施し、報告書を作成する。それと並行して、仲之町と商店街をテーマに商店主らと学生による討論会を開催し、「連携・交流」の可能性を探る。

（3）「南海・東南海地震と紀南―串本町住民意識調査―」

和歌山大学経済学部では、過去２回「南海東南海地震に備える」というテーマで学生の活動として住民意識調査等を実施し報告書にまとめ、地元報告会も開催してきた。今回は昨年の東日本大震災、紀伊半島大水害、さらに南海・東南海地震の被害予測の見直し、南海トラフ地震の発生も予想されるなかで、住民の意識調査を行なう。その活動を支援する。

（4）きのくに活性化センター設立10周年記念式典ならびに記念講演会開催

平成24年４月21日、田辺市新屋敷町の紀南文化会館で、和歌山県や地元自治体、経済界、大学など各界の人が参加して、きのくに活性化センター設立10周年記念式典を開いた。そこでは、平成14年４月に「対等・自立・互恵」を掲げて紀南地域で初めての産官学協同の組織として産声をあげた活性化センターの歩みを紹介、10周年という節目の年を迎えられたことを祝った。また、静岡県商店街振興組合連合会理事長で富士宮市フードバレー推進協議会会長増田恭子さんによる記念講演「笑顔とまえかけ～商店街活性化と女性力～」が開かれた。（Ｐ６に要旨掲載）

センターでは、10年間の取り組みをまとめた『記念誌』を作成した。

新宮の仲之町商店街

きのくに活性化センター10年の取り組みをまとめた『記念誌』

平成23年度事業に取り組んだ事業

（1） 受託事業　串本町「くしもと・大島の歩き方」マップ作成

串本町商工会からの委託で、大島の観光振興と地域活性化を目的に、和歌山大学経済学部学生の協力で、大島・樫野・須江地区でフィールドワークを実施し、観光マップにまとめた。

（2）伝統食文化ブラッシュアップ事業

わかやま産業振興財団「平成２３年度産官学研究推進事業」を活用し、熊野地域の伝統食である高菜を利用した新たな「めはりずし」の試作品を作り、提案した。今後も引き続き参画した有志で検討を進め、商品化をめざす。

独自事業

（1）学生たちが聞き取った「太田・村の暮らし365日」作成・刊行

和歌山大学経済学部学生が、平成22年度から那智勝浦町で地元住民と協同で展開している「太田の休耕田・耕作放棄地再生モデル」事業の一環で取り組んできた村の生活文化の聞き取り調査の結果を冊子にまとめた。報告書は、地元にフィードバックし、地域づくりの機運の醸成の寄与に努めた。

太田の休耕田・耕作放棄地再生モデル

NEWS GREEN COMMUNITY COLLEGE
きのくに
Vol.16【3】
2012〈秋号〉

地域をつくる女性たち①　熊野地域・女性のあらたなつながりを

人とアートを繋ぐ場所　田辺市のまち中で古民家を活用

もじけハウス・プロジェクト代表
画　家　廣本直子

もじけハウスのメンバー

田辺の中心市街地の空き店舗３カ所で、当時東京の美大生だった仲間たちとアートの展示「もじけ展」を行ったのは12年前のことでした。美術館でアートを鑑賞するのもいいけれど、もっと日常生活のなかに入り込んだアートのありようについて考えたい。そんな想いを同じくした仲間が集まり、その実践の場を田辺に求めたのです。

芸術の既成概念をもじく（壊す）ことを目指し展開した企画は、地域のみなさまから思わぬ反響を得、若きアーティストたちの拠点となった築100年の古民家は「もじけハウス」と呼ばれるようになりました。その、もじけハウスが老朽化のため取り壊わしに。そんな知らせをきっかけに2010年暮れ、私は故郷田辺に拠点を移すこととなりました。

新春、耐震補強など最低限の手を加え再出発を切った古民家アトリエもじけハウスは、年間を通して県外や国外から人々が集まる空間となってゆきました。「もじけハウス・プロジェクト」の名の下に、舞踏公演、建築レクチャー、紙芝居公演、能囃子ライブなど、さまざまな企画が展開、中でも、452年以上つづく「田辺祭」に11人の都会参加者を受け入れるプロジェクトでは、そこに居合わせたパリ在住の写真家による『田辺祭写真集』出版という大きな結果を生む事ができました。

そんな中、田辺のまちづくりを担う若手のみなさんとの親交も次第に深まってゆきました。少しずつ互いの思いを知るなか、アーティストと町衆のみなさんが自然に手をとりあう形でこの夏「アート田辺2012」という企画を旧市立図書館を舞台に展開することができました。実行委員のメンバーは市役所や商工会議所に所属する有志のメンバーとアーティストで構成され、国内外からお迎えした７人のアーティストを中心に15人の作家と30人あまりのスタッフで1,500人以上の来場者をお迎えするイベントを盛況に終える事ができました。

「日常にアートを！」を合い言葉に今を生きる人々にとってのアートを探す取り組みが、リアルな生活の場において展開しはじめたのです。このような流れがまるで必然のように巻き起こったのは何故か。それは田辺とう町のありかたや、歴史に大きく起因するものと感じます。コンパクトで人の繋がりの濃い中心市街地と、郊外に広がる人口の絶妙さ、深い山々と海に囲まれた立地、古くは芸術をたしなみとした豊かな歴史。交通の便が決していいとは言えないこの半島に、都会から世界中からアーティストが幾度も通ってくる場となる理由には、これらの背景があると考えます。

アートが日常生活を豊かに暮らす「きっかけ」になれたなら、子供たちの豊かな心を醸造する麹のようであれたなら、いつか人づくり、まちづくりにも繋がってゆくのかもしれない、と感じています。

NEWS GREEN COMMUNITY COLLEGE
きのくに
Vol.16【4】
2012〈秋号〉

地域をつくる女性たち②　熊野地域・女性のあらたなつながりを

ゆずを地域の産業に育てる

農事組合法人古座川ゆず平井の里総括責任者　倉岡有美

古座川町平井地区は、紀伊半島の南部、日本有数の清流で知られる古座川の源流に位置し、周囲を山に囲まれた山間集落です。昭和40年のはじめ頃より林業の副業にと植栽された柚子の木は、「柚子の果汁」が郷土料理のさんまのお寿司によく合うことから地元でも大変貴重で良い値段で取引されてきました。昭和51年には古座川柚子生産組合を結成することとなり、昭和58年には、平井地区にユズ搾汁加工場を建設し、ユズ果汁の本格的生産を開始しています。昭和60年には柚子皮の利用を考えた女性たちがジャムやマーマレード製造の加工事業を開始しています。平成16年には平井集落の住民が出資をし事業を法人化しました。豊作と不作を繰り返す隔年欠果もあり柚子栽培、果汁販売いずれも苦労が多かったようです。そんな中農家の主婦が集まって出来た古座川ゆず平井婦人部の活動は、年々販売額を伸ばすことができ加工事業を行うことで柚子の買い取り単価の安定につなげていくことが出来たと思っています。　当初、「主婦の小遣い稼ぎ」と言われていた加工活動でしたが、産地の窮地を救うのは、地元のおばあちゃん達の活動を応援し、果汁の使用料を増やすこと。「古座川ゆず」というブランドを確立するためには加工品を一人でも多くの消費者に届けることだと思いました。そのためには、古座川の地域をまるごと売る。古座川のファンをつくるということを当時古座川町に招いた、高知県出身の地域プランナー松_良三氏が教えてくださいました。町内出身者に、ダイレクトメールを送り生産者自身が加工品を作っていることをアピールすることは、故郷を離れて暮らす都会の人の心を、応援しなければ・・・。と思わせてくれたのではないでしょうか。

●加工技術伝承

私たちは、新しい商品をつくる際には、まず地域でできることは何かを考えます。少しでも地元の農家さんが作りやすい野菜を副原材料にできないかを検討するのです。大根を使った「古座川の柚子たれ」は、昭和60年に発足した古座川ゆず平井婦人部のおばあちゃん達が生み出したヒット商品ですが、法人化した平成16年以降「おばあの柚子ドレッシング」や「こざがわのぴりっとゆず」など柚子だけでなく副原材料を農家の皆さんに作ってもらいそれを買い上げるということに力を入れてきました。

ドレッシングには、玉ねぎと人参、ぴりっとゆずには、唐辛子をつかっています。

収穫日を農家と連絡を取りながら農業部門が決め、翌日工場に運ばれてくる、原料は、新鮮でみずみずしいものばかりです。多少天候に左右され栽培数量の調整などの苦労はありますが、農家の所得の向上を助けるという点からもこれからもそういったことにこだわりを持って行きたいと思っています。

●女性の視点について

たくさんの加工品を製造することは、それにかかる資材や原材料がそれぞれに必要になることから、リスクをともないますが、平井の里では、年に1度新商品の発売を目指して商品開発を行っています。お客様の「おいしいわぁ」の一言がとてもうれしいし、仕事の原動力になるからです。生活者の目線で今自分が必要とするものは、きっとどの家庭の主婦にも当てはまる確率が高いといえると考えます。安全であること。添加物など極力使用していないこと。便利なこと。もちろんおいしいこと。をこれからも考え商品づくりに生かしていきたいと思います。

●私たちの役割

古座川町内での柚子の栽培面積は、行政の支援もあり近年増えつつあります。40年を過ぎるこの集落の「柚子への思い」を大切にし後世に残してゆきたいと考えています。この美しい山の景色や古座川の澄み切った水は自分たちが責任を持ってここで暮らすということで守っていけるのではないでしょうか。高齢のため作れなくなった柚子園を平井の里の農業部門が栽培を引き受けています。受け取ったバトンを次の子供たちに引き継ぐために、これからも力を合わせてがんばっていきたいと思っています。

NEWS GREEN COMMUNITY COLLEGE
きのくに
Vol.16【5】
2012〈秋号〉

地域をつくる女性たち③　熊野地域・女性のあらたなつながりを

かあちゃんの店、再び。熊野川のほとりで女性の夢を紡ぐ

熊野川産品加工組合・代表　竹田愛子

国道168号、瀞峡街道道の駅の横で「かあちゃんの店」を経営して10年。去年、４月に10周年を祝いました。そして秋には組合員の10周年記念旅行を計画していました。しかし、９月の12号台風はこれを壊し、また店までも奪っていきました。

十年一昔と申しますが、私達はこの10年本当に一生懸命でした。組合員は一つになって「かあちゃんの店」を運営してきたのです。

平成12年に地元の産品を売るお店がほしいと要望書を当時の熊野川町に提出して「自分達で経営するなら建てましょう」と、60㎡の店を建ててもらいました。組合員を募集して一口、２万円の出資をしてもらい「熊野川産品加工組合」を設立しました。そうして平成13年４月29日「かあちゃんの店」がオープンしました。それから10年、順調に売り上げも伸びてきました。しかし、一夜にして店は流されてしまったのです。要望書を一緒に出した組合の理事さんも水害で亡くなり、悲しんでいる間は、店の事を考える余裕すらなく、その日の食事の事で精一杯でした。やがて救援物資が届き、ボランティアの方々も来てくれて、本当に有難く感謝の気持でいっぱいでした。だんだん落ち着いて来ると、水害は悔しいけれど、私たちがあまりに贅沢に慣れすぎてきたのを、大自然は叱りにきたのかなと思ったり、何もなかった昔の生活を懐かしく思い出したりしました。

水害から２ヶ月、やっと電気、水道、電話と復旧して来ると、仲間の事が気にかかり出し「かあちゃんの店」のスタッフで集り、近況を話し合いました。スタッフ８人のうち２人は浸水をまぬがれましたが、他は全員浸水して、避難所や親戚の家の生活でした。

店の再開を話し合い、まずは加工所の確保、イベント等への出店等、第一歩を踏み出さなくては前には進めないと話し合いました。解散したグループの加工所の名義を変えて、初めてイベントに出店した時には、お客さんが待ってくれていて「早く再開してよ」「がんばってね」と大勢の方にお声をかけていただき、背中を押していただきました。市観光課や商工会などのイベントへの参加に声をかけて頂き出店するたびに「お店の再建はまだですか」と問われ、早く販売所を作りたくて、組合の臨時総会を開きました。いろいろな意見が出ましたが、若いスタッフの「かあちゃんの店を続けたい」との意見に組合員も理解を示してくれて、やっと再建に向けて歩き出しました。大阪周辺の若いボランティアの方々が「かあちゃんの店」の再建の手伝いがしたいと来てくれて、店のあった所にテントを張って販売を始め、いろいろ再建に向けての構想図や看板、ロゴマーク等々、作っていただきました。そして県のアグリビジネス支援事業を活用させてもらい、ユニットハウスですが、屋根や外壁等をお化粧してもらい、７月28日やっとオープンする事が出来ました。台風で亡くなった理事さんの初盆には、オープンした事を報告しました。出荷してくれている農家のお年寄りは「よかったね、ここがないと何も作る気になれんよ」と話します。お客さんも「よかったね、待っていたよ」と励ましてくれて、本当にがんばらなければと思います。３、４歩歩けば、裏に出てしまう広さなので早いうちに郷土料理をゆっくり楽しんで頂ける店にしたいと思っています。水害で打ちのめされた私たちに本当に温かい御支援を頂き心から御礼申し上げます。ボランティアの皆様本当にありがとうございました。

かあちゃんの店

NEWS GREEN COMMUNITY COLLEGE
きのくに
Vol.16【6】
2012〈秋号〉

きのくに活性化センター設立10周年記念講演
「笑顔とまえかけ～商店街活性化と女性力～」

きのくに活性化センターでは、設立10周年記念として、静岡県商店街振興組合連合会理事長・富士宮市フードバレー推進協議会会長増田恭子さんを講師に迎えて、「笑顔とまえかけ～商店街活性化と女性力～」と題して記念講演を開いた。

静岡県富士宮市は富士山本宮浅間神社の門前町で、増田さんは駅前商店街で100年近くつづく漬物屋の女将さん。富士宮市も、多くの地方都市と同様、1970年代半ばから街中に大型店が出店、郊外に地元、地元外の郊外店が建ち、商店街から客足が遠のいていった。90年代になると事態はさらに深刻化し、シャッターを下ろす店も現われ始める。「困った、困った」の会話が行き交うなかで、「留守番役」「店番」だったおかみさんたちが立ちあがった。講演要旨は、以下のとおり。

有志が呼びかけておかみさんたちが集まり、始めたのが「危機感を共有し力を合わせるため」の勉強会だった。商店主の妻は意外と世界が狭く、同じ商店街に店を構えながらお互いをよくしらない。「郊外に住む人が増え、生活と商いの場所が別になり、商店街全体への愛着が薄らいできた」のが大きな要因の一つだった。女性たちは、地元の各界の人たちを講師に招いたり、市主催のワークショップに参加し、まちづくりについて学ぶ。その席で、地元の人がどこで買い物をしているかが話題になった。ほとんどの人がスーパーで買い物をし、商店街には行かないと話した。「品ぞろえが悪い、価格も高い」が理由だった。女性たちは、おもてなしのあり方やまちづくりへの理解を深め、2000年に駅前通り商店街おかみさんの会を立ち上げる。

おかみさんの会が最初に取り組んだのが、200メートルほどの長さの商店街の各店を紹介する「きてみてちょマップ」だった。キャッチコピーは「街が見える、人が見える」、商店主やおかみさんの人柄や店の特徴にスポットを当てた、ちょっとユニークな商店街歩きのマップだった。マップができた2000年6月16日に空き地のテントで市を開いて、惣菜や野菜を販売した。「純利益1万円くらい」が自信となり、その青空市は毎月16日に行なわれる「十六市」として今日までつづく。「500歩」で歩けるコンパクトさを利用し、歩いてもらうための「ショッピング・ウオークスタンプラリー」も恒例になった。

おかみさんの会は、異なった業種のコラボレーションによるすしやアンパン、どら焼オリジナル商品を開発しているほか、農家や授産施設、保育園などとの協同によるコンサートや和太鼓、よさこいなど各種イベントを開催し、地域を巻き込み地域を動かす活動で商店街ににぎわいを取り戻してきた。商店街の役員は現在すべて女性で、事業の全面に出るのは女性たちである。駅前通り商店街は、富士宮市内の商店街の成功モデルと呼ばれる。

増田恭子さんの講演

「アイディアの実践は、自分自身の人づくりだった。何かに気づくことが大切。仲良く付き合える、つながりを地域につくることが大事。難しいと思ってもやってみる、失敗したらもう一度やり直せばいい」と増田さんは言う。「地域の人たちに受け入れられる在り方について考え、カタチにしていかなければならない。商店街がないと街が成り立たないという存在をめざしたい」。

きのくに活性化センター研究員紹介

和歌山大学大学院生　**金　月**

私の国籍は中国、出身地は遼寧省桓仁満族自治県、民族は朝鮮族です。2010年5月に日本に留学（京都大学人文研究所）、2012年4月和歌山大学大学院経済研究科に入学しました。いま、「和歌山県における山菜の食文化」の特色を調査し、食を軸とした文化と経済のフュージョンによる山村再生とビジネスモデルの可能性を研究しています。

このテーマと和歌山県を選んだのは、私自身が文化、とくに食文化に関心があること、ふるさとが「山国」で中国でも有数の山菜が豊富な土地で日本と同じ山菜も数多く産していることがあります。私は両親が住む自分の故郷の美しい山や河を誇りに思っていますが、同じように景観が美しく伝統的な食文化が残る和歌山県をフィールドに選びました。

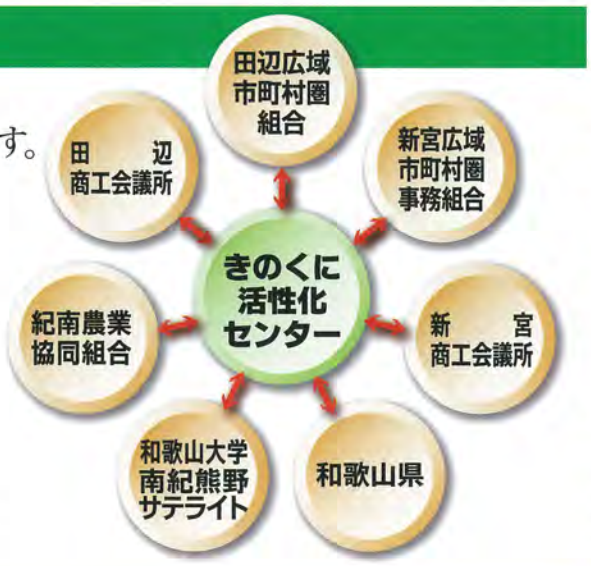
4月に入学してから先生と一緒にフィールドワークで、和歌山県内を歩き、食を中心に日本の山村の文化と暮らしなどを学んでいます。これまで和歌山県南部のいくつかの地域、田辺市の中辺路町、龍神村のほか、有田川町の清水町上湯川、紀ノ川市の山間部を訪れ、地域の山菜と食文化について聞き取り調査をしてきました。まだ少ないデータですが、イタドリをゴンパチと呼んでよく利用されている地域もあれば、イタドリの呼び方も違えばまったく食べない地域もあります。また、中辺路町高原では、大般若の行事の時に食べる山菜盛、山菜ちらしずしなどがあり、清水町にはわさびずしを食べる文化があって、レストランの一番人気になっていました。これからどのような出会いがあるのか、益々楽しみです。

先進国である日本の食文化を生かした地域づくりはいま、どのようになっているのでしょうか。和歌山県の内外で調査研究を行い、それに基づいて地域づくりに関連する食文化の再考、食の商品化のシステムや技術論などを研究するとともに、食を生かした地域づくりの可能性についてさらに深く考察していきたいと思っています。研究の成果は、将来的には私の故郷である中国の桓仁に伝え、地域活性化に生かしていきたいと考えています。どうぞ、よろしくお願いいたします。

きのくに活性化センターの構成

きのくに活性化センターは、
以下の団体・機関で構成されています。
（2012年10月1日現在）

- 田辺周辺広域市町村圏組合
- 新宮周辺広域市町村圏事務組合
- 田辺商工会議所
- 新宮商工会議所
- 紀南農業協同組合
- 和歌山県
- 和歌山大学・南紀熊野サテライト



編集後記

きのくに活性化センターは、2002年の設立からことしで10周年を迎えた。和歌山大学が経済学部を中心に紀南地域に立脚し、地域のなかで地域の人々とともに地域のいまをみつめ、地域をつくっていこうと呼びかけたのを始まりとする産官学の組織である。この10年、何ができて、何ができなかったのか、問いつづけている。

今年度の『NEWSきのくに』（秋・春2回）は、「つくる」をテーマに、紀南地域で地域づくりに関わる女性の活動とオピニオンを掲載する。「つくる」と平仮名表記にしたのは、さまざまな活動があるように、いろいろな「つくる」を考えたからである。「つくる」女性たちが「つながる」ことへの期待をこめた。女性たちが行動するとき、新たな地平が開かれ、もっと楽しい、いくつもの地域と人のドラマが生まれるのではないかと信じる。　（ゆう）